
時を刻む木

J O H N E Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時を刻む木

【Nコード】

N0940B

【作者名】

JOHNEY

【あらすじ】

あの子は天使で、この子は幽霊。彼女たちは、自分たちの頼みごとをきいてくれる人を探してます。ある日突然、裸の木に青々とした葉が一瞬で現れたら、それは「時を刻む木」。全ての葉が地に落ちたとき、それはやってくるのです。

第一話 不思議な二人

僕は普段から理屈で物事を考えるほうだし、理化学的なことを信じている。

でも、彼女との出会いに関しては、どんな理屈を並べても「奇跡」という言葉にしか辿り着かない。

彼女もきつと、そう思っていただろう。

僕が彼女と出会ったのは、冬色に染まった自宅近くの公園だった。

日曜日の夕方、僕は犬を散歩に連れていくため、近所の公園を訪れていた。

公園のベンチに、白いワンピースを着た華奢な女の子と、ジーパン・Tシャツ姿の僕と同一年くらいの女の子が腰掛けているのを見かけた。

しかし突然、僕が連れていた犬が二人に向かって吠え始めたので、

「すみません……。」

と、僕が二人に軽く頭を下げて言うと、二人はなぜか物凄く驚いた様子になり、僕のほうへと駆け寄ってきた。

そして、

「私たちが見えるのですか!？」

ワンピースの女の子が僕の顔を覗き込むようにして言った。

その瞳は輝いて見える。

しかし僕は、その娘の言葉の意図が今いち理解できず、

「はい・・・、見えますけど・・・。」

と、不審な表情でその言葉に答えた。

すると、その僕の言葉を聞いた二人は、手を取り合って喜び始めた。

「私たちの話を、聞いてはもらえませんか!？」

ワンピースの女の子が、懇願するような眼差しで僕に言った。

しかし、明らかに怪しげなその二人の話など聞く気にもなれず、

「今、忙しいんで・・・。」

と、無愛想に応えて、僕はその場を小走りで離れていった。

二人は、僕を呼び止めることなく、ただ寂しげな瞳で僕を見送っていたようだった。

翌日の朝、僕は学校に向かうため、朝ラッシュの満員電車の中にいた。

今年で高校生活も三年目。

いい加減、この窮屈な状況にも慣れてきていた。

毎朝同じ時間の、同じ車両の、同じドアから乗り込むせいか、いつしか不思議と周囲の他人は、顔見知りのような存在となっていた。

ふと無意識に目を向けた先に、見覚えのある女の子がいた。

その娘は、この超満員の電車の中でも特に苦しんでいる様子はない。よく見てみると、その娘は昨日、公園で会ったＴシャツ・ジーンズの女の子だった。

しかも、昨日と同じ服装に見えるのは気のせいか・・・？

僕が降りる駅で、彼女も降り、僕と同じ方向に歩き出した。

僕と同年代に見えるが、この時間に制服を着ていないところを見ると、定時制の学生か、もしくはサボりか・・・、そんなことを考えながら彼女の後ろを歩いていた。

しばらく行くと、僕は彼女の足取りに追いついてきた。

試しに声を掛けてみようと思い、

「サボりか？」

と彼女の肩を叩いた。

しかし、

「は？」

僕の声に振り返ったのは、クラスメイトの男子生徒だった。

僕は状況が飲み込めず、目を丸くした。

「信次、まだ夢の中か？」

僕のクラスメイトが、笑いをこらえた様子で僕に言った。

「透？あれ？今、ここに女の子いなかったか？」

「はあ？お前、いくら彼女いなくて寂しいからって、幻想はマズイだろう！」

クラスメイトの透が、僕の言葉に大爆笑し始めた。

しかし、確かに昨日公園で会った女の子がそこにいたはずなのに、一体この一瞬で何がどうなったのか、さっぱり分からず、僕はただ困惑していた。

授業と授業の合間の休み時間に、次の授業を行う教室へと移動していた僕は、学校の廊下で女の子とぶつかった。

「あ！ごめんなさい！」

ぶつかった女の子が、とっさに言った。

「いや、こちらこそ。」

明らかに僕が余所見していた。

その女の子は、僕とぶつかった拍子に抱えていた教科書を落としてしまった。

僕は、それらを素早く拾い上げて、女の子に渡そうとした。

最後の一冊を取り上げようと手を伸ばすと、それが無数の小さなプリクラと何枚かの写真が貼られた手帳であることに気が付いた。

落とした時に無造作に開いてしまったページには、大きな写真が二枚貼られていた。

そこには、今日の前にいる女の子と、もう一人女の子が仲良さそうに寄り添って映っている。

そのもう一人のほうの女の子を見て、僕はなぜか胸騒ぎがした。

それが、昨日公園で会ったＴシャツ・ジーンズの女の子だったからだ。

拾い上げた手帳を、しばらく凝視していた僕に、女の子が明らかに嫌そうな表情で、

「あのお・・・、それ、返してください・・・。」

と、低い声で言った。

僕は、「ごめん」と一言謝って、手帳を女の子に手渡した。

そのやりとりをクラスメイトの透が見ていたようで、女の子がそそ

くさと僕のもとを離れた後に、すかさず僕のもとへと駆け寄ってきた。

「あの子、タイプなのか？」

「バカ！ちげえよ！」

「いいじゃねえか！なんなら、俺があの子紹介してやってもいいぜ。」

透が、得意げな表情で僕の腕を肘で突付いた。

「知り合いなのか？」

その僕の質問に、

「っていうか、先月あの子に告られたから。」

悪びれる様子を微塵もみせず透は答えた。

忘れていたが、この透は入学した時から異様にモテていた。

あまり他人を悪く言いたくはないが、だいぶ遊んでいるようで、最低二股、最高五股かけていたとか、いないとか。

けして悪い奴ではないのだが、手癖が悪い。

「そついのよせよ。いつか恨みをかうから。」

その僕の言葉を、透は笑ってやり過ごした。

その日の学校の帰り道、僕はたまたま例の自宅近くの公園の前を通った。

すると、ワンピースの女の子とＴシャツ・ジーパンの女の子がベンチの所にいた。

僕は、おもむろにその二人のもとへと歩み寄って行った。

僕に気が付いたワンピースの女の子が、軽く会釈したので、僕もそれに応えた。

そして、

「今朝、学校の近くで会ったよね？」

僕はＴシャツ・ジーパンの女の子に言った。

しかし、返答が返ってこない。

表情をしかめた僕にワンピースの女の子が、

「彼女、しゃべれないんです。」

慌ててフォローするように僕に言った。

一瞬、沈黙が生まれ、気まづくなった僕は、その場を離れようとした。

すると、

「あの、・・・私たちの話を聞いてはもらえませんか・・・？」

ワンピースの女の子が、昨日より深刻そうな表情で、僕に言った。

おそらく、話を聞いてくれる人が現れるまで、こうしてこの公園のベンチに続けるのだろーと思いい、僕は聞くだけきいてみようという軽い気持ちで、彼女の言葉に頷いた。

「ありがとうございます！」

女の子二人は、深々と僕に頭を下げた。

聞くだけ聞いてみた話は、実に現実離れたファンタジー超大作だった。

まず、ワンピースの女の子が初めに口にした言葉が、

「私は、天国から命を受けて降りてきた天使です。」

だったもんだから、僕は思わず聞き返した。

しかし、聞き返しても返ってきた言葉に変化はなかった。

白いワンピースの女の子は、天使なんだそうだ。

そして、Ｔシャツ・ジープンの女の子はというと。

「彼女は、先月末にお亡くなりになった木村里歌さんです。」

幽霊。

つまりお化け。

僕は、この二人にからかわれているのではないだろうか、遅くも気が付いた。

しかし、

「冗談などではありません！信じてください！」

ワンピースの女の子は、必死な形相で僕に訴え掛けてきた。

もし冗談で僕をからかっているなら、大した役者だ。

でも、百歩譲ってこの二人が天使とお化けだと認めたとして、なぜこんなにくつきりはつきり存在しているのが、疑問だ。

その問いに対する答えは、

「それは、あなたがただ単に靈感が強いただけだと思います。現に、この公園のベンチにいる私たち二人に気が付いたのは、あなただけでしたから。」

万遍の笑みでサラッとワンピースの女の子は言っただけ。

これも追求したかったが、僕が靈感体質だということを取りあえず認めたとして、一体二人は公園で何をしてたのか？

話を聞いてもらって、それからどうしようというのか？

それが一番の疑問だった。

「ここからは、話を聞いてもらうというよりは、お願いになってしまいかもしれませんが・・・。

実は、天国にめされる人には、たった一つだけ願いを叶えてもらえる特権があります。

生き返るといふ願いは当然叶えられませんが、こうして下界に魂だ

け舞い戻り、何かやり残したことをやり遂げたいという願いは叶えられるのです。

だから、里歌さんはこうして下界へと舞い戻ってきました。魂なので、下界の人たちとお話することができません。

だから、私がこうして付き添っているのです。」

そんなお伽話のようなことを、ペラペラと真剣な表情でワンピースの女の子は語り続けた。

「里歌さんの願いは、「生前付き合っていた彼にお礼を言いたい」というものです。

里歌さんの彼がどの方なのかは分かったのですが、不運にもその彼には靈感のカケラもないせいか、私ではアプローチすることができず、困っていました。

そこへ、あなたが現れたというわけです。」

「というわけです。」と言われても、「はい。そうですか。」と素直に受け入れることのできない話だった。

つまり、

「里歌さんの代わりに、その彼に里歌さんへの気持ちと、里歌さんからの言葉を伝えて頂きたいのです！どうか、この願いを受け入れては頂けませんでしょうか!？」

というわけだ。

僕は、はっきりとお断りした。

しかし、

「どうか！どうか！！」

そのワンピースの女の子は、見た目には似合わない粘り強さを発揮して、僕に押し迫ってきた。

僕は、何だか無性に恐ろしくなったのか、それとも菩薩のような気持ちが芽生えたのかは不明だが、

「わ、分かったよ……。やればいいんだろう……。」

と、軽く承諾してしまったのだった。

「ありがとうございます！本当に、ありがとうございます！」

ワンピースの女の子は、僕に何度も何度も頭を下げた。

「それでは、早速これからのことをご説明させて頂きます。」

そう言っ、ワンピースの女の子は、指をパチンと鳴らした。

すると、公園の真ん中に堂々と立っていた大きな木に、冬には似合わない青々とした葉が一瞬にして現れた。

僕は、目が点になった。たまたまそこに居合わせた他の人たちも、驚きの悲鳴を上げた。

もしかしたら、ここにいるワンピースの女の子は、本当に天使なのかもしれない、僕は彼女たちを信じ始めていた。

「あちらの木の葉が全て落ちるまでが、里歌さんに与えられた時間です。それは今からおよそ

1週間。

その間に願いを叶え、この下界での最後の時間を堪能して頂くことができるというわけです。お分かりいただけましたでしょうか？」

僕は、まだ驚きの余韻に浸っていたため、至極素直に頷いた。

その僕を見て、ワンピースの女の子は微笑むと、再び指をパチンと鳴らした。

すると、周囲の様子にはこれといった変化は現れなかった。

失敗か？僕は、心の中で叫んだ。

「それでは、里歌さんをよろしくお願い致します。木が全ての時間を刻んだ時、再び迎えに参ります。」

そう言つて、ワンピースの女の子はスーッと綺麗に姿を消した。

第一話 不思議な二人（後書き）

まだ、一作品を完結させていませんが、この作品はわりと短い連載で終わるような気がするので、投稿させて頂きました。THEE NDSと合わせて、どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

第二話 火曜日

自分の部屋にいるのに、どうしても落ち着くことのできない理由があった。

それは、

「何で、キミはここにいるの？」

先月末にお亡くなりになった木村里歌さんが、僕の部屋にいたからだった。

「まあ、どうせしゃべれないんだから、訊いても仕方ないだろうけど……。」

僕は、ベッドに入って、布団の中にくるまった。

すると、

「しゃべれるよ。」

女の子の声が聞こえた。

僕の「彼女いなくて寂しい病」は末期のようだ。

「ねえ、聞してる？」

僕の布団を誰かが引つpegした。

驚いた。

今聞こえた声の主は、木村里歌だったのだ。

「しゃ、しゃべれないんじゃないかなかったつけ・・・？」

僕の明らかな動揺ぶりに、木村里歌はクスクスと笑い出した。

しかも、魂でしかないはずの彼女が、僕の布団を引っぺがしたのは、一体なぜ？僕は、だいぶ混乱していた。

「さっき、公園で天使さんが指を鳴らしたでしょう？最初の一回は木に対して。次の二回目は、私に対して鳴らしたの。」

それでも、僕の頭の上にはクエスチョンマークが複数躍っていた。

「だって、私がしゃべれなかったら、困るでしょ？」

僕は、ただ頷いた。

「じゃあ、いいじゃない。細かいことは。」

木村里歌は、笑うと可愛かった。

僕は、再びただ頷いた。

昨夜、僕は彼女に訊いてみた。

「何で、彼氏に気持ちを訊きたいの？付き合ってたんだから、聞くまでもないんじゃないの？」

その僕の質問に、

「でも、分からなかったの。彼のことか……。だから、聞きたいの。本当の気持ちを。」

微笑みと、微かな哀しみを合わせた表情で彼女は答えた。

僕には、その言葉の意味がいまいち理解できなかった。

「恋愛」って、難しいんだ。

ただ、そう感じた。

今日は火曜日。

公園の木の葉は、まだまだたくさん残っている。

昨日のミラクルは早くも噂として広まったらしく、朝から不思議な木を見に来る野次馬がチラホラ見えた。

「ところで、彼氏に伝えたいことって、何なの？」

僕は、自宅の最寄駅で電車が来るのを待ちながら、横にいる彼女に尋ねた。

「素敵な時間をありがとう。けして忘れません。」

なぜか、僕は胸が熱くなった。

「どうしたの？ちゃんと、伝えてよね！」

「分かってるよ！」「素敵な時間をありがとう。けして忘れません。」
「でしょ！？」

それは、周囲の人たちから見れば、僕の不気味な独り言だった。

いつも通りの時間に、電車がホームに入ってきた。

そして、電車はいつも通りの満員ぶりだった。

学校の近くの駅に着き、僕は人を押しのけてようやく下車した。

「懐かしいなあ。私も毎朝このギューギューな電車に乗ってたっけ・
・・。」

彼女が、電車を振り返りながらポツリと言った。

しかも微かな笑みを浮かべた表情で。

しかし、彼女にとっては懐かしの満員電車でも、僕にとっては迷惑な満員電車でしかなかった。

とても、微笑を向けられるような存在ではない。

「じゃあ、もしかしたら生前、知らないうちに出会ってたかもしれないね。」

その僕の何気ない言葉に彼女は、

「え？うん。」

まるで不意をつかれたかのような表情で、それに応えた。

駅から学校までの道中、僕は透を見つける。

「あ。透だ。」

と、僕が透の方へ駆け寄ろうとすると、彼女が思いがけないことを言う。

「透君。」

しかも、その表情はどこか柔らかな様子で、先ほどまでとは別人のようだ。

「え？」

僕が聞き返すと、

「透君なんだ。私が付き合ってた人。」

彼女は、満遍の笑みを浮かべて、僕の顔を見た。

「そ、そうなの・・・？」

僕は、無意味に動揺してその場に立ち止まった。

「うん。実はね・・・、信次君のことも知ってたの。透君と仲良いでしょう?」

彼女の思いがけない言葉に、僕はさらに動揺してしまった。

透とは確かに親しくしているが、彼女のことは知らなかった。

「じゃ、じゃあ、透と話せば良いんだ・・・?」

その、僕のぎこちない笑顔での問いに、彼女はゆっくりと頷いた。

僕は息を呑んだ。

透が複数股男であることは、もうすでに述べたが、そうになると、彼女に対しての気持ちなど、聞くまでもないことが予想された。

僕は、透にウソでも良いから彼女が大好きだったと、言ってほしいとさえ思った。

そうでないで、彼女が傷つくからだ。

しかし、それは叶わないかもしれない。

なぜなら、透は先月末に彼女が死んだ男とは思えないほどの、明るさだからだ。

「よし!じゃあ、行こう!」

彼女が、考え込んでいた僕の背中を押した。

僕は、そのまま透のもとへと押されていった。

自分の目の前に突然走りこんで来た僕に、透が驚いた表情を浮かべた。

「信次、何だよ！？朝から随分元気そうだな。」

僕は何と答えて良いのか迷いながら、愛想笑いで返した。

「さっさと行こうぜ。のんびりしてたら遅刻になっちまう。」

透が、足早に前に進んでいった。

それを追いかけるようにと、彼女が僕にめくばせる。

僕は複雑な思いはあったものの、急いで透を追いかけた。

「透！」

僕の声に、透は立ち止まった。

「何だよ？」

明らかに、透から迷惑そうなオーラが感じ取られた。

「あ、あの、さあ。」

目が泳いでいる僕に、透は少しイラついた様子さえある。

僕の横では、透には見えない彼女が、僕のわき腹を何度も突付いていた。

「歩きながらじゃ、ダメなのかよ？俺、今月遅刻すると、マジやばいんだけど。」

「あ、ああ。そっか。じゃあ、歩きながらで。」

そして、僕は話を切り出す。

「お前ってさあ、・・・先月の終わりくらいまで付き合ってた子がいたらしいな・・・？」

その僕の言葉に、透の口から予想を上回るほど衝撃的な返答がきた。

「先月？誰のこと？」

僕は沈黙した。

その言葉が持つ意味は、どう解釈すれば良いのだろうか、真剣に考えてしまった。

「だ、誰って・・・？」

「だから、どの子のことを言ってた？ってこと。」

僕は再び沈黙した。

それは、どの子のことなのか分からなくなるほど、つまり、二股以上だったということに間違いなさそうなので、僕は横を見るのが恐ろしかった。

彼女の表情を見るのが恐ろしかった。

しかし、透の気持ちを聞きだすことが僕の役目とあっては、ここで中途半端に話を逸らすことができない。

やはり、彼女がこのまま話を続けてほしいと思っているのかを、確かめてみる必要はあった。

それとなく、彼女に確かめようとしたその時、透が勝手に気付いてしまった。

「あれ？もしかして、里歌のことか？」

「へ？」

僕は、思わず間抜けな声を出してしまった。

「何気に有名だもんなあ。先月の終わり頃に事故で死んだってことで。」

透が彼女のことを覚えていたことには、内心ホッとしたが、それを語る表情に一抹の不安が抱かれた。

「お前に言っただけだよなあ？まあ、普通に可愛かったけど、・・・」

それ以上先は言うな！僕が思わず透の口を塞ごうかと思うほど、透の口からサリと彼女に対する気持ちが出てきてしまう。

「大して好きでもなかったし、正直事故で死んだって聞いたときは、ひいたね。」

透の顔は笑っていた。

僕には悪魔に見えた。

彼女の瞳からは無数の雫が流れ落ちていた。

僕は、大きな後悔を感じた。

その後、学校に登校はしたものの、いつの間にか僕の横から消えていた彼女のことを気になって、勉強どころではなかった。

僕が彼女を傷つけてしまったようで、実に腹立たしかった。

僕がもっと上手に透から話を聞きだしていれば……。

彼女は笑顔で天国に舞い戻れたのに。

昨日、廊下でぶつかった女の子と、僕は再び廊下ですれ違った。

僕は、思わずその子を呼び止める。

「あ、あの！」

女の子は、迷惑そうに僕の方を振り返った。

「もしかして、・・・木村里歌さんの友達・・・？」

その女の子は驚いた表情を浮かべたが、僕の質問に素直に頷いて見せた。

「木村里歌さんって、どんな子だったの・・・？」

「里歌ちゃんを知ってるんですか・・・？」

女の子の表情は一気に暗さを持つ。

「え？まあ。知り合いといえば、知り合いかな。」

「……そうですね……。透さんのお友だちですもんね。」

またか。

僕は正直そう思った。

僕は学校では、どうやら「透の友達」という意味では有名ならしい。

「里歌ちゃんは、明るくて素直で、みんなの人気者でした。私も、ずっと一緒にいたかったのに……。こんなことになるなんて……。」

女の子の声が心なしか震えている。

「でもさあ……。キミ、先月透に告ったんでしょ……?」

僕は、複雑な表情で尋ねた。

しかし、女の子の表情は一変した。

「告ってなんかいません！透さんが、そう言っただんですか!?!」

僕は、あまりに激怒する女の子を見て、ただ、うんうんと頷いた。

すると、女の子は大きくため息を吐いた。

「最低！私は、透さんが何股もかけてるって知って、里歌ちゃんをもっと大事にしてあげて！って言いに行っただけなのに!」

怒り心頭の女の子は、すごい迫力で僕の目の前から歩き去っていった。

た。

透に集まる女の子の全てが、好意をもっているとは限らないようだ
と、僕は僕なりに何かを学んだような気さえした。

しかし、僕の友達は、なんて罪深い男なんだろうと、少し憤りのよ
うなものも同時に感じていた。

家に帰る途中、例の公園の前を通りかかった。

朝よりも野次馬が増えていたが、木の葉は元気に生い茂っている。

僕は、少しホッとした。

しかし、彼女は一体どこに消えてしまったのか。

それが謎だった。

まさか、あまりのショックに天国に戻ってしまったのか？

気が付けば、僕はもう天使も幽霊も完全に信じてしまっていた。

その方が楽だった。

あれこれ彼女たちを詮索するのは正直、面倒だったし、あの必死そ
うな様子から、冗談やウソだとは考えづらかった。

もう、今は僕も信者というわけだ。

自分の部屋に戻ると、思いがけない出来事と遭遇した。

「おかえり。遅かったね。」

そこには、木村里歌の姿があった。

正しくは、姿はないが。

啞然としている僕に、彼女はあっけらかんとした様子で、話しかけてきた。

「マジ、驚いたよ。透の奴、思った通りのバカだったね。」

彼女はケラケラと笑い出した。

「あ、でも、透は信次君の友達なんだよね？ごめん、ごめん。」

あまりにサッパリとし過ぎている彼女に、不自然ささえ感じた僕は、

「里歌ちゃん、無理してない・・・？」

笑えるほど真面目な顔で、彼女の顔を覗いた。

すると、

「今、名前呼んでくれたね。」

彼女は、切ない笑顔で僕を見ると、無意識に流れ出した涙を必死に両手で拭った。

僕は不謹慎にも、そんな彼女を愛しく感じた。

第三話 水曜日

水曜日。

今日も、いつもと変わらない日常が待っていた。

ただ一つ、違うことと言えば、僕が不毛の想いを芽生えさせてしまったことくらいだろうか。

木村里歌は昨夜、僕の前で痛めた心を癒すかのように泣き続け、やがてそのまま眠ってしまった。

幽霊も、一応眠る必要があるらしい。

そして彼女は今朝、元気な様子で、ひどく寝相の悪い僕を、たたき起こしたのだった。

「透には、もう何も話さなくて良いから。残りの時間は、この世界を堪能するために費やすつもり！だから、信次君もそれまで手貸してね。」

起きると、彼女がすかさず僕にそう言った。

願ってもない彼女の言葉に、わざと面倒くさそうな表情で頷き、後から密かに笑う、気味の悪い僕がいた。

今日は、登校途中に透とは遭遇せず、僕は正直、内心ホッとしていた。

横にいる彼女に、透を思い出させたくなかったからだ。

少し、ずるくて欲張りな自分を垣間見たようで、僕は自分で自分が恥かしくなった。

授業中、僕の斜め前の席の透は、ずっと携帯をいじっていた。

どうやら、誰かとメールをしているようだ。

きっと、女の子とのやりとりなんだろう。

僕の横にいる彼女は、それを気に留めていない素振りを見せているが、少なからず気になっているだろうことは、僕にも分かった。

透は、まさか自分の近くに亡くなった元カノがいるとは、夢にも思

っていないだろうから、仕方がないにはないのだが、無神経だと言えはそうかもしれない。

そんなことを悶々と考えているうちに、授業の終了を知らせるチャイムが鳴った。

結局、授業に身が入らないまま一日が過ぎ去ろうとしていた。

そして下校途中、僕は学校の近くで誰かを待っている様子の透を見かけた。

どうせ、女の子と待ち合わせでもしているのだろう。

すると案の上、透のもとへ小走りの女の子がやって来た。

制服はうちの学校のものだ。

よく見てみると、僕の頭の中に最悪のパターンが瞬時に浮かんだ。

透のもとへ駆け寄ってきたのは、先日僕が木村里歌について話をき

いた女の子で、しかも、その女の子は満遍の笑みで透と会話している。

確か、先日話したときは、透のことを「最低」だと言っていたはずなのに。

あれは、どう見ても、透を最低だと思っているような表情ではない。

むしろ、好意を持っているような印象を受ける。

しかし、幸いにも、僕の隣にいる彼女は、二人の存在に気がついていないようだ。

僕は、不自然にならないように、彼女の視界に二人が入らないよう配慮して、その場を離れた。

自宅近くの公園の前に来ると、彼女がユラユラと木の方へと進んで行った。

僕は慌ててそれを追いかける。

「どうしたの？」

その僕の問いに、

「だいぶ、葉っぱ落ちちゃったね。」

寂しげな背中の中の彼女が、呟くように応えた。

「まだまだ、残ってるよ。」

しかし、彼女の言う通り、木の葉は通常ではあり得ない程のスピードで減っていつている。

「これから、・・・どうしようかなあ・・・。」

彼女が、何かこらえるような声で言った。

僕は、ハッとした。

彼女は、さっき気付いていたんだ。

透が授業中に誰とメールをしていたのか。

そして、透が自分の友だちと親しげに待ち合せていたことを。

本当は、気付いていたんだ。

僕は、そう悟った。

僕は、胸が熱くなるのを感じた。

どうにかして、彼女の笑顔を見たいと思った。

そして、こんなに悲しく切ない様子の彼女を、このまま天国へ行かせるわけにはいかないと考えた。

僕は、はっきりと自分の気持ちを確認することができたような気がした。

「明日、どっか行こうか？」

僕は、木の前で呆然と立ち尽くしている彼女に言った。

「明日？学校でしょ？」

と、彼女は一度、鼻をすすってから僕に応えた。

「休むよ。だから、どっか行こうよ。」

僕のその言葉に彼女は、はっきりと返事はしなかったが、僕の方を振り返ると、ニイッと口角を上げて小さく頷いた。

第四話 木曜日

木曜日。

今日は学校を休んだ。

彼女のために何かしないでは、いられなかったからだ。

突然思いつき、突然決まったことだったので、当然、無計画にそれは始まった。

そう、昨日の夜、彼女は僕にイタズラっぽく言ったのだ。

「ねえ、どっか行こうかって、もしかしてデートってこと?」

彼女との初デートなのに、完璧な無計画というのが、何とも情けない感じがしたが、この際、仕方がない。

彼女が朝から眠るまで、ずっと笑っていられるようにする。

それが、今日の目標なのだから。

僕たちは、特に目的もなく、町を歩いていた。

「子どもの頃にさあ、この道を通って小学校に通ってたんだけど、通るのがすごい嫌だったんだよねえ。」

通りかかった道で、僕は小さい頃の記憶を思い出した。

「何で、嫌だったの？」

「その角の大きい家で飼ってた犬が凶暴でさあ、いつあの門を破って出てくるとも分からないからって、勝手に怯えてたんだよ。」

その僕の言葉に彼女は笑った。

「かわいいね。その犬はまだいるの？」

彼女は、角の家の門から中を覗き込んだ。

「あっ！」

すると、犬が勢い良く門に突進してきた。

そして、低い唸り声を上げながら、彼女の様子を窺っている。

「あ、危ないよ！離れなつて！」

僕は、明らかにビビっているのが見え見えな表情で彼女に言った。

しかし、あまり彼女には近寄れなかった。

そんな様子の僕を見て、彼女は大笑の嵐にのまれていた。

こういう意味で、彼女を笑顔にしたかったわけじゃないが、結果才
ーライといったところだろうか。

それから、カフェに立ち寄ったり、ショッピングモールで何気なく
ウインドウショッピングをしたり、時間はあっという間に過ぎてい
った。

その間に、彼女の表情から笑顔を奪うようなことはなく、僕は目標
達成を間近に見ていた。

「そろそろ帰ろうか？」

そう僕が彼女に言った時だった。

彼女が、突然暗い表情でうつむいたのだ。

僕はハッとした。

「う、ごめん！何かいけなかったかな・・・？」

その慌てた様子の僕に、彼女は応えない。

僕は肩を落とした。

すると、

「信次？」

僕の背後から、聞きなれた声がした。

そちらを振り返ると、僕は彼女が突然暗くなった理由が分かった。

「透。」

透の横には、彼女の友だちがいた。

親しげに、・・・いや、まるで恋人のように。

「お前、こんな所に独りで来たのか？」

透が、含み笑いを浮かべながら言った。

僕は、愛想笑いで返した。

彼女の友だちは、僕と目が合つと、すぐに目を逸らした。

僕は、心の中に沸々と湧き上がる何かを感じた。

彼女は、ただずつとうつむいている。

「あ、そうだ。お前には悪いけどさ、俺、この娘と付き合うことになったから。」

透は、彼女の友だちの肩を抱き寄せた。

僕は、無意識に拳を握り締めていた。

「彼女は・・・？・・・木村里歌は・・・。」

その、少し震えたような声の僕の言葉に、透は一度聞き返すと、すぐに返答してきた。

「死んじまった女のことなんか、今さらどうでもいいだろう。俺たちは生きてんだからさ。」

僕は、自分の表情から笑みを消さないように努力しつつも、顔の筋肉はピクピクと引きつっていた。

「キミは、自分のやってることが、どういうことなのか分かってんのか・・・？」

僕は、彼女の友だちをにらみ付けた。

すると、

「だって、・・・もともと私も透さんのこと良いなあって思ってたから・・・。里歌の手前、遠慮してたんです・・・。」

彼女の友だちは、甘ったれた声で答えた。

それが、なおさら僕の怒りをかった。

二人の言葉を耳にして、僕の傍らにいる彼女の肩が小刻みに震えているのが見えた。

そして、僕の中で、プツンっと何かがキレた。

「お前ら、最低だよ！自分が良ければそれでいいのかよ！？平気な顔して他人の気持ちを踏みにじって……！彼女の純粋な気持ちを踏みにじって……！俺だったら、絶対そんなことはしない……！あんな良い娘を傷つけたりしない……！」

そんな僕を見て、

「信次、何怒ってんだよ？そんなに熱くなるなよ。」

透が、ニヤついて言った。

「ヘラヘラしてんじゃねえよ！何も分かってねえんだな！お前となんか、話しても無駄ってことが分かったよ。」

僕は、物凄い剣幕で怒鳴り散らすと、二人の前から立ち去った。

しかし、怒りのままにその場を立ち去って、僕はハッと我に返った。

あの二人の目の前に、彼女を置き去りにしてしまったことに気がついたのだ。

僕は慌てた。

しかし、

「信次君。」

彼女は、僕の後ろをついて来ていたようだった。

僕は、ホッと胸を撫で下ろした。

彼女の表情は落ち込んでいた。

今日の目標が、ここでついに達成されなくなってしまった。

僕は、自分の無力さ加減に、正直ガツカリしていた。

「ごめんね……。」

僕の口からは、その言葉が真っ先に出てきた。

しかし、彼女は僕の手を両手に持つと、

「信次君、……ありがとう。」

静かな声でそう言った。

その表情は、悲しくも優しい笑顔だった。

第五話 金曜日

金曜日。

昨日は、最低な1日だった。

結局、僕はどうしたら彼女に幸せな時間を過ごさせてあげられるのか、全く分からなくなってきた。

やることが、どうも裏目に出ているからだ。

きつと、彼女は僕にウンザリしているに違いない。

あんな、勢いで透を怒鳴りつけた僕だったが、何様のつもりなんだと、後から冷静になって考えてみると、自分で自分に思った。

彼女と透が、彼女の生前どのように過ごしていたかなんて知らないくせに、一丁前に偉そうなことを口走ってしまった僕。

なんて、ウザイ奴なんだろう。

僕は昨夜ベッドの中で独り、悶々とそんなことを考えていた。

昨日の帰りの道中、彼女は何ら傷ついた様子もないような素振りで僕に話しかけてきていたが、内心はどれほど傷ついているのだろうと考えると、僕はとても笑顔にはなれなかった。

そして、今日は始まった。

近所の公園の近くを通りかかると、例の木がまだ元気に青い葉をつけているのが見えた。

その近くを何気なく見回すと、ワンピースの女の子が目についた。

「あ、天使さんだ。」

彼女は、嬉しそうにワンピースの女の子の方へと駆け寄って行った。

僕も、それを追いかけるように、女の子のもとへと駆け寄った。

「おはようございます。里歌さん、気持ちをお話しすることはできましたか？」

ワンピースの女の子の、痛い質問が飛んだ。

しかし、彼女は照れくさそうに、

「それは、もう良いんです。私、もともと眼中に入れられてなかったみたいだから。」

少し笑いながら答えた。

ワンピースの女の子は、複雑な表情を浮かべた。

そして、

「里歌さん、残された時間は、もうわずかです。月曜日の朝には、ここを離れなければなりません。お分かりですよね……？」

ワンピースの女の子の表情に、心配の色が浮かんた。

僕も、ワンピースの女の子のその言葉には、ハッとさせられた。

そう、彼女とは遅かれ早かれ離れなければならないのだ。

僕の表情は、一気に強張った。

彼女は、ワンピースの女の子の言葉には、

「分かってます。」

と、ただ一言で答えた。

学校に登校した僕だったが、またもや勉強に身の入らない状況にあった。

彼女とは、離れなければならない。

それは分かっていたことだったが、改めて言われると、ゾッとする

ような嫌な感じがする。

僕は、このままで良いのか？

僕は、彼女に対してこのままで良いのか？

僕は、・・・。

結局、答えの出ない質問を自分に投げ掛けているうちに、下校の時間がきてしまった。

彼女は、いつも学校について来て、僕の傍らにいつもいる。

時々、分からない問題を教えてくれたりして、頼りになる存在で、笑顔が可愛くて、強引なところもあるけど、人に優しくて。

僕は、そんな彼女が好きみたいだ。

いや、それは知ってたけど、こんなに深いとは思ってなかった。

きつと僕は、この気持ちを抱いたまま彼女と離れることになったら、後悔するような気はしていた。

それを伝えた瞬間に、彼女と過ごす時間が終わってしまう可能性だつてある。

でも、・・・。

そして、下校途中、近所の公園の前に来たとき、僕は思い切って彼女に気持ちを伝えようと、彼女に声をかけた。

「あ、あ、あの、さあ……。」「

何とも、不自然な呼びかけだった。

すると、彼女は僕の言葉を聞く前に、何かを言う。

「……。……。」「

しかし丁度、風の音でかき消されてしまい、僕には聞こえなかった。

「え？ごめん！聞こえなかった。」「

僕が、聞き返すと、彼女は少し暗く、少し悲しげで、少し笑い、少しはにかみ、少し照れた、複雑な表情で、僕に言う。

「ごめんね。」「

僕は、え？と再び聞き返した。

何故、彼女が僕に謝っているのかが、分からなかったからだ。

すると、彼女は僕の目をみつめて、言う。

「ごめんね。私、・・・・・・・・信次君が好きです・・・・・・・・。」

僕は、啞然とした表情で、その場に張り付いたように立ち尽くしてしまった。

第六話 土曜日

土曜日。

今日は学校が休みだったのだが、僕は朝早くに家を出た。

どうも、部屋にいるのが気まづかったのだ。

昨日、僕は彼女から思いがけない言葉を聞かされた。

「好き」という言葉だ。

それも、それは透に対してじゃない。

僕に対しての「好き」だった。

僕は混乱した。

僕は朝早くから一人で駅前のファーストフード店で、深刻な表情を浮かべて小さくうなっていた。

窓際の席に座っていた僕は、店の外を行き交う人たちを無意識に見つめていた。

すると、僕はその中に透の姿を目にした。

と、同時に、透も僕の存在に気付いて、こちらを見た。

そして、透は何を思ったのか、僕のいるファーストフード店に入っ

てきた。

僕は、明らかに動揺した。

一昨日、僕は透を怒鳴りつけたばかりだったからだ。

まさか、透は僕を殴りにでも来たのではないかと思い、僕の目の前に現れた透を見た瞬間、身構えた。

しかし、

「よお。こんな所で何してんだ？」

透は、いたって普段の様子と変わらなかった。

僕は少し安心した。

少なくとも、透は僕を殴りに来たのではないことは明らかだった。

「ちよつとな・・・。」

僕は、複雑な表情でジュースをすすった。

「この間はどうしたんだ？やけに苛立ってたみたいだな？」

「え・・・？」

透は、どうやら一昨日僕が怒鳴ったのは、ただ単に機嫌が悪かっただけなのだと思っていたらしい。

「でも、水臭いよなあ、お前も。」

透は、僕に向かい合うようにして席に着いた。

「水臭い？」

僕は透の意味不明な言葉に聞き返した。

「だってお前、里歌と付き合ってたんだろ？」

その透の言葉は衝撃的だった。

僕が木村里歌と付き合ってた？

「だ、誰がそんなこと言ってたんだよ！？」

僕のその勢いの良い質問に、

「誰も言っていないけど。ここ最近お前があんまり里歌、里歌ってうるさいからさあ。そうなんじゃないかと思ったただけだけど。違うのか？」

とぼけた表情の透が答えた。

僕は、ハアッと大きなため息を吐いた。

「そんなわけないだろう……。彼女がお前と付き合ってたことだつて知らなかったし、第一、木村里歌を知ったのは、つい先日なんだよ……。」

その僕の言葉に、透は「ふうん」と言った後、一瞬沈黙した。

「でも、あいつ死ぬ前に言ってたぜ。好きな人がいるって。」

「だから、それはお前だろう?」

僕はため息混じりに透の言葉に応えた。

すると、

「そうじゃなくて、里歌が俺をふった時にそう言ってたんだよ。」

透が微妙な笑顔で言った。

「ふった? 彼女がお前を?」

透は頷いた。

「付き合ってたんだろう?」

その僕の言葉に、透は再び頷いた。

「少しの間だけけどな。でも、ある日突然、里歌のほうから別れようって言ってきたんだよ。実は、他にずっと好きな人がいたんだって。」

僕は、その透の言葉を聞いて、ただただ驚いていた。

「で、それは誰だっけいたら、俺の友だちだっていうからさ。俺はてっきりお前のことだと思ってたけど。」

僕の頭の中は混乱しきって、透の言葉に返答する言葉が見つからない状況にあった。

その後の透との会話は、ほとんど覚えていなかった。

僕は呆然と、家に帰り、自分の部屋へと舞い戻った。

そこには、少し暗い表情の木村里歌が、まるで僕を待っていたかのように呆然と立っていた。

僕は何も言わずにベッドに潜り込んだ。

すると、彼女はすかさず、

「怒ってるの・・・？」

僕の肩に触れて言った。

僕は何も応えないでいた。

「ねえ、信次君・・・？」

彼女の暗い声が聞こえた。

「怒ってるんだ・・・。私が・・・好きだって言ったから・・・？」

「違うよ。」

僕は無愛想な声で答えた。

「じゃあ、何で・・・？」

その彼女の言葉の後、部屋の中に重い沈黙が立ちこめた。

僕は沈黙を断ち切るように、ベッドから起き上がった。

「本当のことを言ってくれよ。」

僕は彼女の目を見た。

「本当のこと・・・？」

彼女は首をかしげた。

「本当は、透の他に好きな奴がいたんだろう？」

その僕の質問には、彼女は何も返答してこなかった。

僕は再びベッドにもぐった。

「キミは、透のことなんて、特に好きでもなかったのか・・・？キミは、俺をからかったのか・・・？本当はもう、その好きな人に気持ちを伝えて、やることはないから、バカみたいに戸惑ってる俺を見て笑ってたんじゃないのか・・・？・・・最低だな・・・。」

僕は、そう言い放った次の瞬間には、言ったことをひどく後悔した。しかし、言い過ぎたことを謝ろうとベッドから起き上がった時には、すでにそこに彼女の姿はなかった。

すぐに僕は近所を探し回った。

しかし、彼女の姿を確認することはできず、夜が更けていった。

そして結局その日、彼女は部屋へ帰ってこなかった。

第七話 日曜日

日曜日。

僕は、誰かに起こされた。

それは木村里歌ではなく、ワンピースの女の子だった。

僕は、あからさまにガッカリした。

「お話しがあります。」

ワンピースの女の子は、これまでにないほど真剣な表情で言った。

僕は、ベッドから起き上がると、ワンピースの女の子の話を聞いた。

「里歌さんに、昨日の夜会いました。泣きじゃくっていて、事情を聞くのに苦労しましたが・・・。」

僕はとっさに、

「彼女にひどい事を言っちゃって・・・。俺が悪いんだ・・・。」

と言って、うつむいた。

すると、

「彼女もそう言っていました。」

ワンピースの女の子のその言葉に、僕は顔を上げた。

「自分が悪いんだって。・・・だから、信次さんが、笑ってくれない、と・・・。」

しかし、僕はそのワンピースの女の子の言葉には、再びうつむいてしまった。

「確かに、彼女は悪いかもしれませんが・・・でも、それも彼女なりの事情もありましたし、考えや気持ちもあつてのことですから・・・。」

ワンピースの女の子は、真剣な表情で話を続けた。

「彼女は、叶えられる願いがあるのなら、叶えたいことがあると言つて、次のように言いました。『一度も話したことのない人だけど、遠くもなく近くもない場所からいつも見ていた人がいた。好きな気持ちも伝えられないままあの世に召されることになってしまった。だから、その人と少しの時間でいいから共有したい』と。」

僕は、ゆっくりと顔を上げた。

「その願いを叶えるべく、私は里歌さんと二人でやって来ました。しかし、彼女の願いには、大きな壁がありました。彼女が面識のない人に私がコンタクトしても、彼女のことを知らないのでは、彼女と共に過ごしてくれるとは思えなかったのです・・・。だから、ウソをつきました・・・。」

「ウソ・・・？」

僕は聞き返した。

「はい……。里歌さんの願いを叶える手伝いをしてほしいと、その人に……。」

僕は息が止まるほどの驚きに襲われた。

ワンピースの女の子が言っていることが、にわかには信じられない気持ちもあった。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！じゃあ、木村里歌が好きな人って
いうのは……。」

「信次さん、あなたです。」

僕はひどい胸騒ぎの中、自分の手が震えていることに気がついた。

それくらい思いがけない、驚愕の真実を、僕は受け止めきれなかったのだろう。

そして、ワンピースの女の子は詳細を聞かせてくれた。

面識のない僕と時間を共有する手段として、生前の一番最後に付き合った透にお礼を言いたいという依頼を持ちかけることにした。

しかも、透は僕の友だちということもあって、依頼を受け入れてく

れる可能性は大いにあると確信したのだ。

そして、僕はその依頼を引き受け、彼女と時間を共有するようになった。

しかし、共に過ごすにつれて、彼女の中で欲が生まれた。

僕に気持ちを伝えるということだ。

しかし、彼女はそれを正しいことだとは思っていなかった。

すでに靈魂となっている自分に、気持ちを伝えられても、僕が困るだけだと思ったからだ。

だから、彼女は僕に謝ったのだと、僕は今頃になって気がついた。

しかし、ワンピースの女の子の話が真実だとしても、僕の中には疑問もあった。

僕とは面識のないはずの彼女が、一体いつどこで僕の存在に気がついたのだろうか？

現に、僕は透と彼女が少しの間でも付き合っていたにも関わらず、彼女のことを全く知らなかった。

・・・一体何故・・・？

そして、これは疑問ではないが、僕は彼女に謝らなければならないし、伝えなければならぬ言葉もあった。

何が何でも、もう一度彼女に会う必要があった。

しかし、彼女に残された時間は、もう少ない。

明日の朝には完全に天に召されていくのだ。

僕は焦りと共に、胸の中に熱い何かを感じていた。

僕は無意識に部屋を飛び出して、走っていた。

第八話 月曜日

月曜日。

ついに朝が来てしまった。

ずっと彼女の行方を捜していた。

しかし、一向に見つからない。僕の気持ちの中で、諦めの色が滲み出ていた時、僕は近所の公園にたどり着いた。

木についていた青い葉は、残すところ数えるほどしかないことに気がついた。

僕は、一気に脱力感に襲われ、近くのベンチに座り込んだ。

気付けば、そこはワンピースの女の子と彼女に初めて出会った場所だった。

僕は鼻水をすすった。

木の葉が一枚落ちた。

その葉が風に舞う様子を見ていた僕に、誰かが声をかけてきた。

それは聞き覚えのある声だった。

いや、むしろ、捜し求めていた声と言ったほうが正しいかもしれない。

「信次君・・・？」

彼女は、暗い表情で僕を一直線に見ていた。

僕は、あまりに突然彼女が現れたことに驚き、声を詰まらせた。

そして、

「ごめん！」

「ごめんね！」

僕と彼女の声は、上手にハモった。

「え？」

彼女は、驚いた様子で僕の顔を見た。

「ごめん・・・。昨日は言いすぎた・・・。・・・じゃなくて、・・・誤解してた・・・。あんな傷つけるようなこと言って、最低なのは、俺のほうだ・・・。」

「信次君・・・。」

僕は座っていたベンチから立ち上がった。

「昨日、あのワンピースの女の子から聞いたよ、全部・・・。でも、何で・・・。」

そう僕が言った時、僕の視界にワンピースの女の子の姿が入った。

僕は間もなくの別れを悟った。

「・・・・・・・・・・。毎朝、電車の中で信次君を見てたの・・・・。高校に入学してからずっと、いいなって・・・・。でもある日、透君から付き合おうって言われて・・・・。透君とは、その前に何度か話したこともあったし、優しい人だと思ってたから、断る言葉が見つからなくて・・・・。そしたら、信次君が透君の友だちだったから、びっくりした。」

彼女が、少しはにかんだ笑顔を見せた。

「透君のことは、確かにすごい好きだったわけじゃなかった・・・・。でも、一緒にいて楽しかった・・・・。でも、透君の近くで時々見かける信次君のことを、気付いたら目で追ってて・・・・。私、こんなじゃ、透君に失礼だって思ったの・・・・。だから、別れようって・・・・・・・・。」

彼女は、ややうつむき加減で話していた。

「その後、私、信次君に気持ちを伝えようって、決意したの・・・・。でも、そのすぐ後に事故にあって・・・・。」

ワンピースの女の子が、彼女の背後に近づいてきた。

「里歌さん、・・・・・・・・そろそろ時間です・・・・・・・・。」

彼女は、ハッとした表情で後ろを振り返った。

僕は焦った。

彼女が行ってしまう。

そう思ったからだ。

「俺は・・・、キミが好きだ！」

その、少し震えた声の僕の言葉を聞いた彼女は、勢い良く僕の方を振り返った。

「本当は、伝えるべきか迷った……。キミとは、必ず離れなければならぬことを分かってたから……。」

僕の方を真っ直ぐに見ている彼女の瞳が潤んでいた。

「でも・・・、でも、好きなんだ……。」

彼女は、僕の方へ駆け寄ってきた。

「ありがとう。・・・、私、信次君に会えて良かった……。」

彼女の声は震えていた。

しかし、無情にも木の葉の最後の一枚が風に乗ってゆっくりと降下し始めた。

すると、突風のような激しい風が、彼女と僕を遮るように吹き荒れ始めた。

僕は、とっさに彼女の方に手を差し伸べた。

すると、彼女はしっかりと僕の手を握った。

「素敵な時間をありがとう！けして、忘れない！！」

僕は、風に負けないほどの声を張り上げて叫んだ。

すると、彼女の微笑みが見えたような気がした。

突風が去ったその瞬間には、もうすでに、その場に彼女とワンピースの女の子の姿はなかった。

しかし、この手に残る彼女の手の感触は、まだ鮮明だった。

それは、僕がまだ高校生の頃の話で、もちろん、それ以来木村里歌の姿は見えない。

僕はそれからしばらくの間は、大きな悲しみに押しつぶされそうな気持ちで過ごしていたが、今はそうは感じていない。

むしろ、僕は彼女に感謝しているのだ。

誰かを本当に愛する気持ちを教えてくれた、僕の掛け替えのない初恋の彼女に。

第八話 月曜日（後書き）

作者のJOHNEYです。ようやく、完結させることができました。ここまでお付き合い頂いた方々に、感謝の一言です。至らない点があり過ぎて、申し訳ないです……。今後も、どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0940b/>

時を刻む木

2010年12月10日00時17分発行